

# 報告 アート・トークしものせき 2017「あなたの知らない都市・下関」 下関市と東亜大学との連携協力に関する包括的協定にもとづく事業

磯永 和貴<sup>1</sup> 川野 裕一郎<sup>2</sup> 清永 修全<sup>3</sup> 高月 鈴世<sup>4</sup> 岡本 正康<sup>5</sup>

## 序 地域の大学と美術館の連携プログラム「アート・トークしものせき 2017」の概要

本報告は、平成28年度に東亜大学(下関市一の宮学園町)と共同で開催したシンポジウム形式のイベント「アート・トークしものせき 2017」について、当日の基調講演、対話集会の内容を、当日の配布された資料の再録とともに記載するものである。また、本イベントに連動して実施した市街巡見企画についても概要を紹介する。

「アート・トークしものせき」は、平成27年度(2015年度)に締結された「下関市と東亜大学との連携協力に関する包括的協定」(平成27年(2015年)10月9日締結)の一環として、東亜大学と下関市立美術館が共同で企画したイベントである。同年度中の締結を記念した開催を初回(下記)とし、本報告が対象とする平成28年度(2016年度)の開催は、第2回目となる。

「アート・トークしものせき」は、2回の開催を通して、「都市としての下関」を基本テーマとしている。これは、連携協定で設定された連携事項の主要5項目(「教育研究、生涯学習、文化スポーツの振興発展」、「地域産業の振興」、「都市全体の価値・魅力向上」、「まちづくり(地域づくり)」、「人材育成」)を踏まえたものである<sup>6</sup>。また、両開催とも、下関市立美術館で開催する特別展と関連づけを行い、実施時期は当該展覧会の期間中に設定し、内容も展覧会の記念イベントとして主題に即したものとなるようはかっている。平成28年度(2016年度)の「アート・トークしものせき 2017」の場合は、大正期の日本洋画を対象とした特別展「動き出す！ 絵画 パール北山の夢—モネ、ゴッホ、ピカソらと大正の若き洋画家たち—」(会期：平成29年(2017年)1月28日～同年3月12日)に関するものとして、都市・下関の大正時代(あるいは近代)がいかにあったかというテーマを掲げ、展覧会観賞とあわせて考察する機会を提供するものとして、プログラムを構成した。

「アート・トークしものせき 2017」の詳細に入るに先立って、以下に資料として、「アート・トークしものせき」の初回となった平成27年(2015年)秋の開催の概要、及びこれら「アート・トークしものせき」の原型となったイベント—平成24年度(2012年度)の特別展「ポール・デルヴォー—夢をめぐる旅—」開催時の連続シンポジウムについても概要を再録し、序に代える。

1 東亜大学人間科学部国際交流学科准教授

2 東亜大学芸術学部長

3 東亜大学芸術学部アート・デザイン学科教授

4 下関市教育委員会教育部文化財保護課主任

5 下関市立美術館館長補佐 ※以上、所属・職名は、本紀要作成の平成30年(2018年)3月時点のもの。

6 下関市立美術館が下関市内の大学と連携して行う事業には、他にも梅光学院大学(下関市向洋町)との間において、「展覧会ワークショップ」と銘打った特別展関連イベントの企画運営の例があり、これは平成22年度(2010年度)以来、回を重ねている。梅光学院大学においても、下関市との包括連携協力協定を締結し、東亜大学と同様の連携事項を設定している。(「下関市と梅光学院大学との連携協力に関する包括協定」締結期日：平成27年8月31日)。

〔「アート・トークしものせき」初回と原型イベント〕 ※関係者の所属職名は、各催事の開催当時のもの

平成27年度(2015年度)

下関市と東亜大学との連携協力に関する包括的協定締結記念

アート・トークしものせき 「国際都市」下関で「日本画」を考える

平成27年(2015)11月15日(日) 13:00～15:00 / 下関市立美術館 講堂

〔司 会〕 清永 修全 東亜大学芸術学部アート・デザイン学科教授

〔パネルディスカッション—パネリスト〕

デール・スティーラー 東亜大学芸術学部アート・デザイン学科准教授

徳田 和幸 東亜大学芸術学部アート・デザイン学科4年

プリ・パラス 九州産業大学芸術学部3年

〔コメンテーター〕

岡本 正康 下関市立美術館主査

河本 華子 下関市立美術館学芸員

※特別展「北海道立近代美術館コレクション選 日本画逍遙」(会期=平成27年11月13日～12月27日)関連催事

平成24年度(2012年度) ※「アート・トークしものせき」の原型となったイベント

東亜大学芸術学部新学部改称発足記念 / 下関市立美術館特別展「ポール・デルヴォー」開催記念  
連続シンポジウム「画家ポール・デルヴォーとシュルレアリスム」

・シンポジウムⅠ「シュールな時代、再び? シュルレアリスムの世界とその可能性」

平成24年(2012年)10月27日(土) 13:30～15:15

東亜大学 13102 講義室(下関市一の宮学園町 2-1)

時間割 / 講演: 13:30～14:15 / パネルディスカッション: 14:30～15:15

・シンポジウムⅡ「シュルレアリスムの彼方へ ポール・デルヴォーの絵画を観ながら」

平成24年(2012年)12月15日(土) 13:30～15:15

下関市立美術館 講堂(下関市長府黒門東町 1-1)

時間割 / 講演: 13:30～14:15 / パネルディスカッション: 14:30～15:15

〔司 会〕 清永 修全 東亜大学芸術学部アート・デザイン学科准教授

〔講 演〕 渡邊 祐子 下関市立美術館 学芸員

〔パネルディスカッション—パネリスト〕

川野 裕一郎 東亜大学芸術学部アート・デザイン学科教授

東 義真 東亜大学芸術学部アート・デザイン学科講師

岡本 正康 下関市立美術館 学芸係長

渡邊 祐子 下関市立美術館 学芸員

※特別展「ポール・デルヴォー —夢をめぐる旅—」(会期=平成24年11月17日～平成25年1月14日)関連催事



下関市・東亜大学包括的連携協力事業  
アート・トークしものせき 2017「あなたの知らない都市・下関」

【日時】平成29年(2017年)2月5日(日) 13:00～15:45

【場所】下関市立美術館 講堂(下関市長府黒門東町1-1)

【プログラム詳細】

13:00～13:30 第1部 基調講演「近代下関の都市的経験」

講師：磯永 和貴 東亜大学人間科学部国際交流学科准教授

13:45～15:45 第2部 対話集会「下関・近代都市としての魅力」

大学教員、文化行政実務担当者、美術館学芸員と来場者によるトーク

【聴講者】40名

---

## 第1部

### 基調講演「近代都市下関の視覚的経験」

〔講師〕 磯永 和貴

東亜大学の磯永です。本日の講演では「近代都市をどのような視覚から見るか」に焦点を当てたいと思います。今日の講演では「絵はがき」を材料にしながら、会場の皆さんとともに下関を見る「視覚」についても考えていきたいと思います。すでに本館の広報誌『潮流』の128号に「近代下関の都市的経験」と題したテキストを寄稿し、「近代都市下関」を見る視覚として、情報、衛生、ガス、電気、市場、交通、教育の視点を提示しています(56～57頁に再録)ので、重複を避けながら進めていきます。また、「とある私の記憶」という物語風のレジュメを配布しています(58頁に再録)。強調したいのは、「近代都市の視覚的経験」は、下関だけではなく日本の各都市に起こったことであったとともに、何よりも「個人」としての経験であったという点です。「とある私」というのは自分だと思ってください。「個人」がどんな経験を踏んで近代都市ができ、自分が近代都市の中でどのような経験を積んでいったのかを明らかにするのがこの講演の目的です。



さて、今回の話しの材料としては絵はがきを使います。下関市の「景観の表象」としてとらえることができます。地理学ではよく「景観」という言葉を使いますが、「風景」や「風土」、「景色」といった方が当てはまる言葉です。「景観」という言葉は、人間不在の人工物のように受け取られています。しかし、人間が活動していて「景観」を作るわけで、人間がどう「景観」を受け取っているのかが重要な意味を持ちます。地図では人間の存在が不透明になります。山や川や道路や鉄道や建築物などしか載っていない。その中の人間の生活は見えてきません。人間には五感がある。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚があって生きているわけです。五感をフル活用しながら今日は「絵はがき」を見てもらって、会場の皆さんやパネラーの皆さんとともに近代下関の風景を考え、さらに後の「アート・トーク」につなげていきたいと思います。

近年になって地理学では「サウンドスケープ(音の景観)」がよく取り上げられます。下関の海峡に立って目を瞑ってじっと聞いた時にどんなふうに感情が揺さぶられ「心の景観」が浮かんでくるかということです。下関海峡は「日本の音100選」に選ばれております。非常に素晴らしい海峡の音が評価されています。もう一つは「メンタルマップ」という考え方で、頭の中の地図のことです。皆さん今日ここに来られるのに地図見ながら来られたわけではない。地図は持たなくても頭の中の地図で動くことができます。車に乗られる方の中には「カーナビ」を頼りに来られた方もおられるとは思いますが。人間は生まれながらにして空間を獲得します。近年の地理学では「絵はがき」や「風景画」とかといったようなものを対象にします。

ところで、「景観画」という言い方はないですよ(笑)。「景観画」というと人間不在で、「風景画」には人間が存在します。一般的な解釈としては「風景」とか「景色」が「景観」よりピンとくるわけです。またそれによって感覚も変わってくると思います。私の研究は地図史です。江戸時代までは「絵」「図」「地図」の区別は全くありませんでした。例えば「山水画」と「地図」の区別はありません。近代になっていつの間にかそれらが分かれました。皆さんが鉄道に乗られる時、駅で鉄道の路線と料金を示した「図」を見られると思います。あれも本当は「地図」なんです。近代に西洋の文化が入って分かれてしまったのです。東洋的な考え方が消え、地理学の扱う範囲が狭くなったと考えられます。その意味で、今回の美術館の展覧会「動き出す！絵画」も地理学のよき材料となると思います。

では、教育のお話からはじめます。図1は「下関市立関西尋常小学校」です。外壁は板張りです。和風であるけれども、ガラス窓などがあるなど洋風な感じがします。また小学校には洋式の机や椅子が導入されました。家ではどんな生活かということ、よほどの家ではなければ椅子や机はありません。しかし、小学校に行くと西洋的で近代的な生活をしなければならない訳です。図2の「彦島尋常高等小学校」には立派な講堂が建っていることがわかります。しかし、手前には「藁葺きの屋根の家」が見えます。小学校に通う生徒のほとんどは、このような前近代的な建物の中で昔ながらの生活をしてきたわけです。ところが、小学校に行ったら立派な近代的な建物なわけです。小学校は地元資本で立てられますので、「あそこの村が立派な小学校を建てたから自分の村ではもっと綺麗な近代的な小学校を作ろう」ということになりました。建物も重要ですがもっと大事なものは「時間」の概念が定着するということです。「カラン、カラン」という鐘の音で学校が始まり終わるわけです。「24時間」というのがスタートして「1週間」という単位が始まりました。近代になると子どもは小学校に行くと家にはいません。そうすると、親たちは子供に気兼ねなく商売に出ることもできるし、田畑を耕したりできるようになります。これは「労働の確保」ができるということです。

次に「工場」について見ていきましょう。工場の下関への進出は大正年間に始まります。北九州工業地帯が発達して、一番近い彦島に目をつけられるわけです。「日本金属株式会社彦島精錬所」〔図3-1〕が、大型の工場としては初めて入ったところです。爆弾の材料を作っていて当時のロシアに売っていました。ところでこの絵はがきは描いた絵ですね。これも「絵はがき」です。図3-2は社員食堂と社宅です。ここにも椅子と机が並んでいます。たまには日本食だけでなく、洋食も出されたことでしょうか。夜勤になれば夕食や夜食も提供されたことでしょうか。また社宅も整備されていきました。このような工場に勤めると今までとは生活が一変する

わけです。このような工場や様々な会社が見られるようになるのが大正時代ぐらいからで、昭和のはじめになる頃に定着したと思われます。また、社宅から一般の住まいに住むようになってくる。こうなると、会社で給料をもらって八百屋さんや魚屋さんなどで食料品を買ったり、デパートに行って洋服や靴を買うようになります。ほんの50年ほど前が自給自足だった生活が消費生活へと一変してしまったということです。

さて、このように移り変わる近代の下関の中でどのように「風景」はとらえられていたのでしょうか。図4は下関海峡の風景です。この絵はがきは私が好きなものの一枚です。帆掛けの和船が写っていて、煙を出す洋船も走っています。まだまだ和風なところも残りながらも、洋風なものも混在している訳です。下関の近代が強調されている絵はがきの一つであり、このようなものが観光客に販売されていたことに注目していただきたいと思います。また下関というところを象徴するものとして「関釜連絡船」[図5]は特に重要です。アジアとのモノと人の流れが下関へ集中し、それが発展していったのが大正時代で、近代都市下関が完成するのです。もう一つは、いわゆる漁業が注目されます。漁業が発展するのも大正時代です。明治には冷蔵庫がなく、遠くから魚を持ってくるのが不可能なわけです。トロール船が出てきて、外洋への漁業が本格化していきます[図6]。これは冷凍技術の発展と大きく関係しています。また当時は関門トンネルがなかったので、貨車をそのまま運搬する船がありました(図7)。この絵はがきには色が塗ってありますけれども、この色は実際の色であったかは不明です。しかし、カラー写真がなかった当時において下関が近代的であったイメージを定着するのに一役買ったと考えられます。

下関の近代都市としての機能という意味では、観光地であり軍都であったことにも注目しなければなりません。下関には「下関要塞」がありました。今の東駅の付近には「下関重歩兵連隊」や「練兵場」などがある巨大な軍事基地が築かれていたわけです。下関はアジアの玄関口なわけですから、軍事的にも重要な意味を持っていました。また、アジアで戦争が行われると物資や人々の集積地となり、そして出入り口となったのです。江戸市場は魚市場で有名ですが、最初は野菜市場として日本三大市場の一つになりました。図8の絵はがきに「昭和14年2月18日下関要塞司令部許可済」とあるように下関には「下関要塞」がありました。ほとんどの絵はがきには下関の要塞司令部の許可の日付が入っています。軍事機密が写っていないかを確認したということです。司令部の許可がないと絵はがきが発行できないわけです。よく間違えられるのですが、この日付が写真を撮った日だというふうに解釈される場合がありますが、これは許可が出た日です。今回紹介する絵はがきのほとんどは撮影の正確な年月日が分かりません。しかし、少なくとも許可以前であることは判明します。図9は「下関名所旧跡絵はがき」の下関の名所の絵はがきがセットになった袋です。「下関要塞司令部許可」・「修学旅行記念」の文字が印刷されています。「修学旅行」が本格的に始まるのがまた大正時代です。修学旅行は学校教育の一環として行われました。「観光」は、「国の光を観る」という意味で、修学旅行もその地域に行って勉強して帰ってくる。何らかのテーマがあって「観光を体験」することによって、イメージが変わるということです。下関が修学旅行や観光の地として位置づけられました。観光の話をしてみると、「巡礼」が一つの典型として挙げられます。例えばメッカに行くのが目的でもあるけれども、その旅の途中で様々な経験を積むことに意味があります。また、その目





図1 下関市立関西尋常小学校



図2 彦島尋常高等小学校—全景

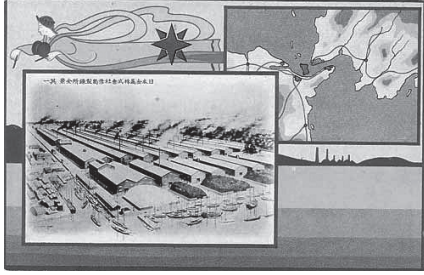


図3-1 日本金属株式会社彦島精錬所全景

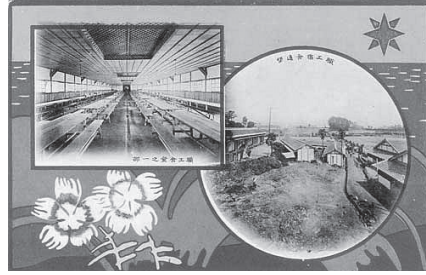


図3-2 職工食堂之一部

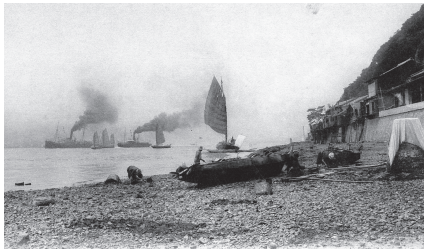


図4 (下関名勝)御裳川(安徳帝崩去地)

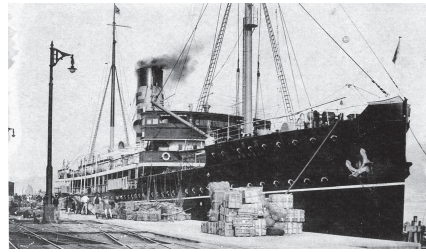


図5 (下関名所)関釜連絡船及棧橋

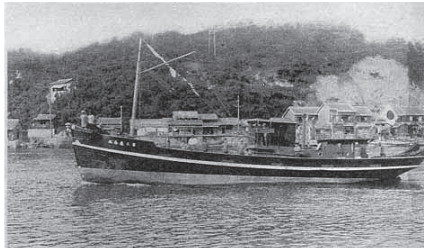


図6 林兼 五拾噸型 底曳網漁船

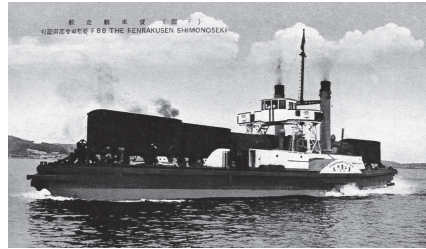
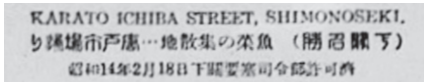


図7 (下関)貨車航走船



図8 (下関名勝)漁業の集散地…江戸市場通り  
昭和14年2月18日下関要塞司令部許可済



〔同上左上「下関要塞司令部許可済」の記載〕

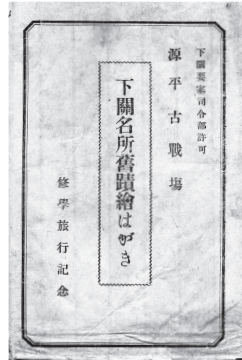


図9 下関名所旧跡絵はがき 袋

的地が素晴らしい土地であることも大切です。下関の地も歴史的に有名でかつ輝く近代都市として位置づけられていたと考えられます。

近代都市としての下関のもう一つの注目点は「下関駅」です〔図10〕。下関の停車場ができた当初の駅名は「馬関駅」でしたが「下関駅」に名称が変わりました。下関の当初の市名は「赤間関」でしたが、「下関条約」によって世界中に知られ、「下関市」に名前を変えました。イメージとは大切なものであることが判ります。下関駅とその周辺は、市のシンボルでした。私は福岡県の大牟田市の出身です。中心街にはデパートもありました。ときどき遊びや買い物に行きましたが、「街へ出る」という言い方をしていました。下関でもちょっと離れたところから「下関駅」の周辺に来ることを「街へ出る」と同じような意味の言葉があったと思います。大正時代ぐらいに流行る言葉に「銀ブラ」がありますが、銀座をぶらぶらするだけで近代的な経験になるわけです。「下関駅」の周辺は憧れであり、「近代的視覚的経験」につながった場所であったということです。その中心的役割を担ったのが「山陽ホテル」〔図11-1〕です。非常に立派なホテルで、内部も洋風でありました。今のホテルのロビーとあんまり変わりません。山陽ホテルで座ってコーヒーを一杯飲むとすれば相当気分的には高揚する世界だったと思います〔図11-2〕。大正時代は、まさに一般の人々の近代的な都市経験が始まる時代であるということだと思います。図12の絵はがきは駅前の広場で、その裏側は関釜連絡船の乗り場です。絵はがきの題は「新装なれる…駅前広場の盛観」とあって当時の状況を彷彿とさせます。まさに華々しい風景で「山陽通り」は市内随一の繁華街でした。一方の唐戸市場周辺の風景ですけれども、ここには英国領事館はじめとする煉瓦造りの洋風の建物が多く立ち、市内電車がすでに開通していました。図13は赤間神宮の裏にある「紅石山」から撮った唐戸の風景です。日本の近代の風景を「黒」で表現する人が多いのですが、この絵はがきは華やかな雰囲気です。これも着色したのですが、よく当時の雰囲気を表していると思います。「黒」というイメージからかなりカラフルなものに変化していることを表したかったんだろうという動機の跡が見えます。今回の展覧会の絵画にもそうした意図が見られるものがあります。大正の頃になるとヨーロッパに行っても、かつて洋行した画家の作品を見たり写真だけでみたりした時代となっていたと思います。しかし、先輩たちが描いたものを真似したり、写真を忠実に再現したりではなく、独特なものを作り上げていく。日本人が一番上手いのは、西洋から入ってきたものをいかに日本的な日本人にあったものに変えていったということだと思います。

最後に絵はがきが何を撮影しているかを分析して当時の下関の代表的な風景は何かを検討しておきます。やはり最も多いのは「関門海峡」です。次に多いのが「春帆楼」、要するに「下関条約」が重視されています。三位は「赤間神宮」、四位は「安徳天皇陵」、五位は何かというと「亀山八幡宮」です。皆さん「誰でも行くところじゃない。今の観光地と同じ」と感じられたと思います。近年建てられた「下関水族館」や「カモンワーク」などは別として、大正の頃には今と同じ観光地が定着していたと考えられるわけです。どこを切っても「金太郎あめ」、紋切り型の観光地がすでに下関でも大正頃出来上がってしまっていたということです。これも「近代都市下関の視覚的経験」の中の一つとして位置づけられると考えます。下関を外部の人たちがどう見ていたかとかを表す一つの指標となるのではないのでしょうか。以上でこれから始まる「アート・トーク」の切り口として、いくつかの問題点を提示させて頂きました。





図10 下関駅



図11-1 山陽ホテル全景



図11-2 山陽ホテルロビー



図12 【下関名所】新装なれる…駅前広場の盛観



図13 (下関名所)紅石山より市街を望む

## 第2部

### 対話集会「下関・近代都市としての魅力」

～大学教員、文化行政実務担当者、美術館学芸員と来場者による共同トーク～

〔司会〕 清永 修全 東亜大学芸術学部アート・デザイン学科教授

〔パネリスト〕 礒永 和貴 東亜大学人間科学部国際交流学科准教授

川野 裕一郎 画家、東亜大学芸術学部長

高月 鈴世 下関市教育委員会教育部文化財保護課主任

岡本 正康 下関市立美術館主査

※各所属・職名は開催当時のもの

#### 清永(司会)：

それでは、これより対談集会「下関・近代としての魅力」に移りたいと思います。わたくし、司会を仰せつかりました東亜大学芸術学部の清永と申します。よろしくお願いいたします。

基調講演では、礒永先生に近代都市としての下関の景観ならびに近代都市としての経験を可能にしてくれる不可欠な条件や制度が形成されていく様子を「情報」「衛生」「ガス・電気」「市場」という4つのトピックスから描きだしていただきました。そこでは、明治以降の日本の近代化の中で、この「下関」という都市自体が近代都市として他にない独自のアイデンティティと輪郭を育んでいくプロセスが浮き彫りになってきたのではないかと思います。

それを手がかりにしつつ、これからおよそ1時間にわたって以下のゲストの方々と一緒にさらにさまざまな観点から光を当てつつ、その尽きない魅力と面白さを引き出していきたいと思います。その前にゲストの皆さんをご紹介します。まず先ほど基調講演を賜りました東亜大学人間科学部国際交流学科 礒永和貴先生、つづいて下関市教育委員会教育部文化財保護課主任の高月鈴世さん、お次は下関市立美術館主査で学芸係長の岡本正康さん、最後に東亜大学芸術学部長 川野裕一郎先生のお四方です。それでは、皆さん、よろしくお願いいたします。



会場風景

#### 1. 都市づくり、都市計画と景観

##### 清永：

とかく人は日々の生活に埋没し、自分の周囲の空間を何の変哲もない至極当たり前のものとして、とりたてて意識することもなく通り過ぎ、やり過ごしてしまいがちです。そこから身を引き起こし、今一度新鮮な眼差しで自分たちの暮らす街を見つめ直してみたい。そこで、この下関という地域を例えば「都市づくり、都市計画と景観」という点から見た時、一体どんなものが見えてくるのか、どんなことが言えるのか、まず礒永先生と高月さんにそれぞれ伺ってみたいと思います。

礒永：

私は下関では五感を生かした都市づくりが必要だと考えています。都市の景観は刻々と変わっていきます。昔のノスタルジックな景観を追いかけても、現代に消えたものが多いのです。しかし、案外と音などの五感に関係しているものが残っています。味覚では今も「フランス・レストラン」が非常に多い。というのは下関に洋風文化が逸早く入ってきたところだからです。過去の食べ物は都市づくりの一つになります。

私が10年前に下関に来た時、時々夜2時になると突然目が覚めることがありました。何が原因か分からない。それは、大型船がその時間帯に関門海峡を通過する際に大きな汽笛を鳴らすのが理由でした。住んでいたのは新下関ですから、もっと関門海峡に近い人にとってはこの汽笛の音は迷惑だという人がいると思いました。しかし、私はこの汽笛の音こそ下関のサウンドスケープとしての魅力だと思います。

都市づくりの中に我々が再認識することが多くあります。下関はよそ者が集まっている街だと思います。私は京都に25年近く住み、下関に来て10年になりますが随分と街が変わりました。皆さんは何代も下関にお住みなっている方でしょうか、それとも私のようにどこからか来られましたか。私は下関にずっと住んできた人と、新たな外から来た人との自由参加型の都市づくりを再構築していくことが必要と思います。内からと外からの目線によって活かされる街づくり、日頃気づいていないものを再発見するということができないものかと思います。今回は「街歩き」を行います、皆さんが「こんなところ歩いたことない」ところに行って下関の都市づくり再発見してもらいたいと思います。

高月：

私は建築の歴史を主にやっていますので、建築の歴史から見た下関の特徴をご説明したいと思います。

まず、近代を迎え、江戸時代の街の様相から近代の街の様相へと変わっていき、大正時代、1920年代には大体今の生活のものが一式整ったと言われています。日本の近代化で非常に大きな役割を担ったのが灯台の建設です。関門海峡には、兵庫開港に伴い2基の西洋式の灯台、下関側に六連島灯台(明治4年11月(※旧暦=1872年1月)建設)[図1]、門司側に部埼灯台(明治5年(1872年)建設)[図2]が造られました。

これは下関市立歴史博物館の所蔵で、文久3年(1863年)にヤン・ヤックス・デ・ハートが描いた「下関攘夷戦争図」という史料[58頁資料③-3]で、幕末の頃の関門海峡の様子が描かれたものです。ここには、標識の石柱が記録されていますが、このような目印は、近代に入ると灯が点される航路標識に変わっていきます。



図1



図2



明治期に西洋化が進むにあたって、建築ではイギリスの技術者を招聘しますので、明治建築はその影響を強く受けています。

下関に残っている一番古い洋風建築は、唐戸交差点のところにある下関南部町郵便局<sup>なべちよう</sup>です。明治33年(1900年)に建てられた現存最古の現役郵便局舎で、国の登録有形文化財になっています。その理由のひとつとして明治30年代の日本人建築技術者が西洋建築の意匠を修得した一つの到達点であることが挙げられます。少し難しく聞こえるかもしれませんが、イギリスから入ってきた西洋建築を勉強した日本人建築家が、一定の水準を明治30年代には自分のものとして修め、自分の技術として使いこなせるようになってきた指針となる作品と考えていただくといいと思います。この建築が下関に残っていることも大切ですが、下関の近代建築をぐるりと一周してみると、日本の明治以降の建築のデザインの歴史が一通り分かるということが一つの特徴です。下関に明治時代に建てられた建物は煉瓦造のものが残っていて、大正時代の建築は、1927年にル・コルビュジエが唱えた「近代建築の五原則」のひとつである、屋上庭園をもつものが早くも現れ、大正4年(1915年)に旧秋田商会ビル[図3]が建てられています。



図3

ここに紹介する下関南部町郵便局、旧下関英国領事館、旧宮崎商館は、明治時代に建てられたもので、旧秋田商会ビル[下関観光情報センター]、旧逓信省下関郵便局電話課庁舎[田中絹代ぶんか館]は大正時代に、藤原義江記念館は昭和12年(1937年)に建てられました。これを並べてみると、明治時代の建物は大体二階建てで、表に煉瓦が見えているものが多く、瓦屋根が葺かれている。大正時代の建築は「過渡期の建築」と言われ、デザインの上でも建築の技術の上でも一番変化に富んだ時代と言ってもいいのではないかと思います。それぞれ独特の特徴を持ち、時代の雰囲気がよく現れています。そして、昭和10年代になると今の建築とほとんど変わらない。この一通りの建築の歴史が、写真ではなく建物そのものを見て追うことができるのが、下関の街の特長です[59頁資料③-6]。

このほかに、下関には水道の歴史もあります。上水道は近代化に不可欠なものですが、明治34年(1901年)に下関に英国領事館が設置されるにあたり、下関と門司のどちらに領事館を置くかで相当論議がなされていますが、何故イギリスが下関を選んだかという理由の一つに、明治34年の時点で下関では既に水道の敷設が決定していましたので、じきに工事にも着手することが影響したようです。ちなみに、門司は明治45年(1912年)に通水しています。

最後に、明治の建物と大正の建物が唐戸交差点のところと並んでいる。道路を挟んで向かい側には、明治の英国領事館が立っている。さらに英国領事館の向かい側には、昭和の初めのビルが立っている。先ほどから建築の歴史を追うことができるのが特長だと話しましたが、その最も象徴的な場所が唐戸交差点になるかと思っています。

## 2. 日本における近代都市の成立と下関の位置

清永：

大正時代末期から昭和初期にかけてまずは大阪を中心に日本で最初の本格的な大衆消費社会が誕生します。天保2年(1831年)京都で木綿商として創業した「高島屋」が、大正8年(1919年)に「高島屋呉服店」として大阪に乗り出し、その「高島屋」を主なテナントとして昭和7年(1932年)に大阪の難波に東洋一の規模を誇る大規模百貨店として「南海ビルディング」がオープンします。それは日本における大衆消費社会の到来を告げる象徴的な出来事とされています。さて、その波は、やがて東京を経て、さらに日本各地へと広がっていくことになります。ところで、大衆消費社会の成立にとって、市場やデパート、商店街の発展は決定的な意味を持つだけでなく、都市の景観、ひいてはそこに住む人々の都市経験を豊かなかたちで育んでいくことになるかと思われまます。そこで、市場や商店街の形成と発展についても伺ってみたいと思います。

磯永：

下関の場合の商店街は、江戸時代から考えなければいけないと思います。江戸は古くからの下関の中心地で老舗が多かったので、今もそういう感覚があります。それに対して新地は新たに開発された場所です。さらに、豊前田はその後に発展をしてきました。

大正期頃の商店街はやはり豊前田が中心でした。旧下関駅を中心にした「浜通り」がメインでオフィスビル街が登場しました。その裏側にいわゆる一般的な商店街や飲屋街があったわけです。下関に商店街ができたのは、大衆社会が下関に誕生した大正頃です。幼稚園、小学校、各種の専門学校などの教育機関ができると家には昼間に子どもがいないわけです。その間に大人は仕事にでかけることができることになります。街では農業中心に自給自足が崩れ、食べ物や衣類や生活に必要なものをお金で買わなくてはならないわけです。だから商店街ができるようになったことになります。

このきっかけは、情報が大きく影響したと思います。例えば、情報としては大正頃になるとラジオや映画が入ってくる。明治の時には、日露戦争を契機にして新聞が広く普及するわけですが「読む」「見る」という行為から、「聞く」や「動く」情報に大きな差が生まれました。その頃に下関に工場ができて、「そこで働くと金が儲かるんだ」という情報が広がったわけです。「情報」というものはそれまでの経済を全く変えてしまいました。明治の頃はほとんどの人たちが自給自足だったのです。大正の頃になると本格的に人が都市に集まってきて、都市的な消費を開始していくことになりました。さきほど高月さんがお話になられたように、いろんな建築物が建てられ、街並みが違ったかたちになっていって、大衆化された建築物とかといったようなものも出てくる。下関市内には、大正の様相を伝えているような建築物もたくさん残されているというのも一つの魅力だと思います。それから、ビルだけではなくて、二階屋というのは構造も大体大正時代に出てきます。二階にも人が住む。明治までは二階というのは倉庫みたいになっていたところでしたが、大正になると二階にも住み出しました。和洋折衷の二階屋で、一階が店で二階の居住空間が登場する。下関に「丸山通り」や「要通り」「豊前田」などの商店街や飲み屋街ができてきました。夜に行くと古い建築物がないように思いますが、昼間に行くとまだまだ残っています。私の知り合いと「昼間に歩く豊前田」を計画しようという



話がありました。昼間の方がはるかに新たな観点で面白い街が見えてくるなあとっております。

高月：

今、大衆の消費活動というところで、都市の話が磯永先生からありましたが、消費活動の一端として目に見えて現れてくるものとしては、清永先生から、大阪には南海ビルディングが昭和の初期にできたというお話がありました。東京だと、銀座に残っている高島屋東京店や三越日本橋本店は昭和初期につくられたもので、重要文化財になっています。昭和初期につくられた百貨店が今でも現役で使われています。では、同じ頃の下関はどうだったかといえば、昭和7年(1932年)に開店し、戦争の影響で昭和19年(1944年)には閉じてしましますが、西細江町に山陽百貨店がありました。昭和7年には下関にも百貨店があつて、南海ビルディング、三越や高島屋と規模は違うかもしれませんが、東京や大阪で味わえる消費生活が下関でも体験できていたということは、大きな特徴ではないかと思えます。消費社会の象徴的な建物が百貨店だと思われそうですが、これが下関に残っていたとすれば、都市としての下関のイメージにまた一つ新しいイメージが加わるのではないのでしょうか。

岡本：

下関市立美術館を代表して出席する者として、美術館の設立にもかかわるお話をいたします。まず、商都としての下関を振り返る意味でも、ある商家の様子を描いた図を一つ見ていただこうと思います[図4]。これは、まだ市の名称が「赤間関市」であった頃のものの、赤間町にあった河村商店の店頭風景です。赤間、唐戸の一带は、明治・大正の頃と平成の今ではかなり道路の走り方も異なっておりますが、この河村商店の所在地は、現在の風景でいえば、おおよそ赤間ドームのある交差点の一角、東京第一ホテル下関の建つ丘の側の角にあたります。図の出典は、下関市立歴史博物館の所蔵する史料で、明治23年(1890年)に刊行された『家昌フ赤間の賑<sup>いさか あかま にぎわい</sup>』という書物です。この史料には、下関の主だった商店の様子を描いた版画が多数掲載されており、たいへん興味深いものです。

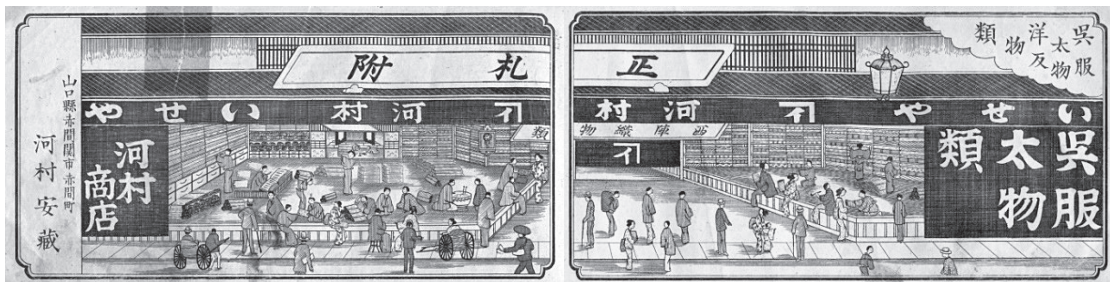


図4

その中から、河村商店を取り上げたのは、この商店の経営に大正末から昭和初期にかけてたずさわっていた人物が、下関市立美術館の設立にかかわっているためです。その人こそ、河村幸次郎で、明治34年(1901年)に生まれ、平成6年(1994年)に亡くなった方です。世代としては、生まれ年が昭和天皇と同じで、どういう時代を生きられた人かおわかりいただけるかと思いま

す。河村幸次郎氏が下関で呉服商の経営に当たられたのが1920年代の半ば頃からで、第二次世界大戦中には事業を整理して拠点を東京に移しています。戦後、80歳台にさしかかって自身の美術品のコレクション—岸田劉生ほか日本の近代美術を中心とする自身の美術コレクションの下関市への寄贈を実現され、これが当地での美術館設立の基礎となりました。

さて、図に戻りますと、描かれているのは、まだ幸次郎氏が生まれる前の時代の店の情景なのですが、注目していただきたいのが掲げられている屋号です。「河村商店」とある一方で「いせや」という文字も大きく書かれています。そして図の枠外に「山口縣赤間関市赤間町／河村安蔵」と住所と代表者名が記されます。「河村商店」については、河村家が経営する呉服商であるからして当然ですが、それとは別に掲げられる「いせや」とは、すなわち「伊勢屋」。これはこの呉服商が、伊勢にゆかりがあることを示すものです。

かつて長府博物館の館長も務められた藤田寛治氏にお聞きしたところによりますと、下関の商家というのは、代々世襲するとして、必ずしも家の男子にあとを継がせるのではない。娘があれば、その娘さんに婿取りをして優秀な人を外から招き入れる。外の血を入れて、商売を繋いでいく習いであったというのです。人を求める先は、やはり日本の商業の中心である上方—大阪、近江、そして伊勢もその範囲であったのでしょう。河村商店は、幸次郎氏の回顧談<sup>2</sup>によると、江戸時代に発祥し、幸次郎氏が継ぐまで五代続いたということですが、ご遺族に伝えられるお話でも、もともと伊勢にゆかりのある方が経営にあたり、そこから「いせや」と通称されていたということです<sup>3</sup>。幸次郎氏は、大正末頃から経営にたずさわっていますが、その実父が、図に名の記された河村安蔵です。この呉服店は、現在、「河村商店」というよりも、「伊勢安」という屋号でよく知られていますが、これは、図にも名前が示されているところの当主・河村安蔵の「安」の字を「伊勢」とつないだものというわけです。この呉服商の歴史は、昭和15年(1940年)に幸次郎氏が下関での事業をいよいよ整理して東京に拠点を移し、昭和20年(1945年)の空襲で店舗の建物が焼失することにより幕を閉じます。

現在まで私共では、写真資料で河村商店と特定されるものを確認できていないため、商売の様子は、こうした図から想像するばかりです。かなり間口の大きな店頭風景で、おそらく誇張もあると思われますが、「呉服 太物 洋反物類」とあり、明治時代から西洋風の服飾品の取扱も行っていただであろうことがうかがわれます。呉服商というものは、服飾という文化を軸に、さまざまな分野、様々な地域の文化が行き交う場所で、下関という交通の要衝においては、一層それが華やかなものであったのではないかと想像されます。

河村幸次郎氏は、こうした環境を最大限に活用した人で、舶来文化にかかわるものを含むさまざまな品—こけし、レコード、オルゴールなどを収集し、若くしてコレクターとして名を馳せています。同時に、人と物が行き交う下関という土地で、河村幸次郎氏は、九州、あるいは大陸に向かう人、帰る人を接待し、文化事業もさまざまに企画実行しています。「関門の文化ならこっちが問屋だ」という幸次郎氏のことばも伝えられていますが、「文化の問屋」という

1 西川逸舟編集発行『家昌フ赤間の賑』明治23年(1890年)、下関市立歴史博物館蔵

2 河村幸次郎「特集インタビュー1 河村幸次郎氏」『豊浦 同窓会誌』22号、山口県立豊浦高等学校、昭和58年(1983年)9月

3 平成25年度(2013年度)に下関市立美術館で開催した企画展「河村幸次郎と美の世界」の準備期間中の河村幸次郎長男河村洋一郎氏(故人)及び長女美代子氏への聞き取りによる。

表現自体に、商業人ならではの意気もうかがわれます<sup>4</sup>。

実は、幸次郎氏は、お名前からもわかるとおり次男です。ここで実兄である河村良介という方についてもご紹介しましょう。河村家のご長男であった良介氏は、後年、貝の収集家として、貝殻の標本のコレクションでも有名となった方ですが、家業は継がず、東大を出て金融界に活躍されました。三和銀行の役員として重きをなし、のちにJCBの創立に携わって日本のカード信販事業の草創に尽力された方であります。こういった経済や金融の世界でも大きな働きをされる人材も下関の商家から出ている。そういう雰囲気、気分というものが、下関にはあったのでしょうか。

それでは、大正時代、下関にはどのぐらいの人口があったのでしょうか。大正9年(1920年)のデータが掲載された『明治大正国勢総覧<sup>5</sup>』という文献によりますと、72,300人。このデータの精度がどの程度かといった批判を行う能力はございませんが、過去を想像するに手掛かりとしたいと思います。ご参考まで、他の都市についても見てみましょう。首都東京が、2,173,201人と、200万都市です。東京市ということで、今の東京都のたとえば23区を切り出した部分との比較も適当ではないと思いますが、おおまかなイメージをつかむということでご容赦ください。一方、大阪が約125万人、これに次ぐのが神戸で60万人、京都が59万人というところです。下関と同じ港町で、大きな街としては、横浜が42万人、長崎17万人。門司が、下関とほぼ同じ7万2千人、というわけで、関門兩岸で合わせて約14万人。さらに現在の下関・北九州両市の圏域との比較で、当時10万都市であった八幡まで合わせると、この一帯には24、5万人の人が集まっていたということになります。こうした経済圏でのさまざまな文化の展開、それがどういう傾向をもつものであったかは、たいへん勉強しがいのあるテーマです。

ひとまず下関の河村幸次郎という一人の経済人をサンプルとしてみると、彼は、茶道具に代表される古美術ではなく、モダン文化、ハイカラなものを志向したことが特徴といえると思います。例えば、海峡管弦楽団というアマチュア・オーケストラの結成。これは、対岸の門司で国鉄の門司鉄道局の有志によって結成された門鉄管弦楽団に刺激される格好で下関に発足したもので、河村自身チェロ奏者として演奏活動にも参加しています。西洋のオーケストラというものは、1920年代の前半という当時、新しい文化として今からは想像がつかないほどインパクトがあったのではないのでしょうか。その他、舞踏家の石井漠らを招いての公演を下関の劇場で打つなど、興行師のようなこともされています。

そして、磯永先生のお話でも出てきましたが、ラジオというメディアへのかかわり。河村氏は、大正末の下関でラジオ送受信の公開実験を行っています。生前の河村幸次郎氏は、このことを若き日の業績として誇りとし、しばしば語り草とされ、NHKの先も越したのだなどと語られたりしています。下関でのラジオ送受信実験は、大正14年(1925年)の5月のこと、ラジオの放送は、同年の3月に現在のNHKによってはじまっていた河村氏の思い違いであったのですが、関門地域ではもちろん幸次郎氏らが初です。当時、日本では、最新テクノロジーであったラジオへの熱がたいへん高まっており、下関でも早速これに反応したわけです。いまだラジオというより無線電話と言ったりしておりますが、下関での実験のきっかけは、当時下関に居

4 藤山一雄「ヂシツプリン即天才(満洲科学同好会の頁)」『国立中央博物館時報』第4号、昭和15年(1940年)3月

5 東洋経済新報社編『明治大正国勢総覧』、東洋経済新報社、昭和2年(1927年)



住していた日本画家の高島北海(1850~1931)の息子である高島三郎と河村幸次郎氏の出会いがありました。高島三郎(1903~1932)は、早稲田の理工科に学び、ラジオ技術にも明るかったため、さっそく企画をまとめた河村が各方面に手配し、馬関毎日新聞主催として挙行。馬関毎日新聞では、実験の予告やラジオ／無線電話についての解説記事が度重ね掲載され、実験成功ののちには、その模様が詳しく報じられています。その中に当日のプログラムも残されていますが、これをみると会は、三部構成で、海峡管弦楽団、門鉄管弦楽団という関門海峡兩岸の管弦楽団が相まみえたにぎにぎしいものです。大正末の下関はひじょうにモダンでハイカラなことをやっていたもので、当時もよいアピールになったことでしょう。

### 3. 下関における歓楽街の発展

清永：

先ほどの礒永先生のお話の中でも多少触れていただいていたことなのですが、近代以降の大衆消費社会の中で、商店街と並んで非常に重要な役割を果たしている存在に歓楽街というものがあります。それは、とりわけ大衆社会到来後の都市にとって、街のにぎわいを伝えるのみならず、街の活力の不可欠な一つの象徴、バロメーターでもあろうかと思われます。19世紀のパリの歓楽街が印象派をはじめとした当時の前衛画家や文豪たちの間でどんな役割を果たしたかを思っただけでもその存在の大きさは頷かれてきます。現在の下関では、とりわけ豊前田地区がとりわけ有名ですが、聞き及んだところでは、かつての時代には他にもいくつかのそうした歓楽街が栄えていたと聞きます。歴史的には、下関の歓楽街の発展はどう描けるものなのでしょうか。

礒永：

歓楽街のことは、先ほどの講演会でお配りしました地図〔図5、昭和8年(1933年)「下関市街地図」、発行所駿駿堂旅行案内(大阪)を拡大〕でお話ししましょう。やはり地理学者は地図が大好きでして、地図を刷ってきました。地図で東駅付近に赤く塗られているのが軍隊の施設です。下関には下関要塞司令部があり、下関重砲聯隊、「大島」には練兵場が白く塗られて描かれています。軍隊の病院(衛戍病院)などもありました。その軍隊施設から唐戸へ「電気軌道」、いわゆる「チンチン電車」が通っていました。軍隊というのは毎日訓練ばかりしているわけではありません。休暇の時には街に出て行って、歓楽街に繰り出していったのです。唐戸の位置は

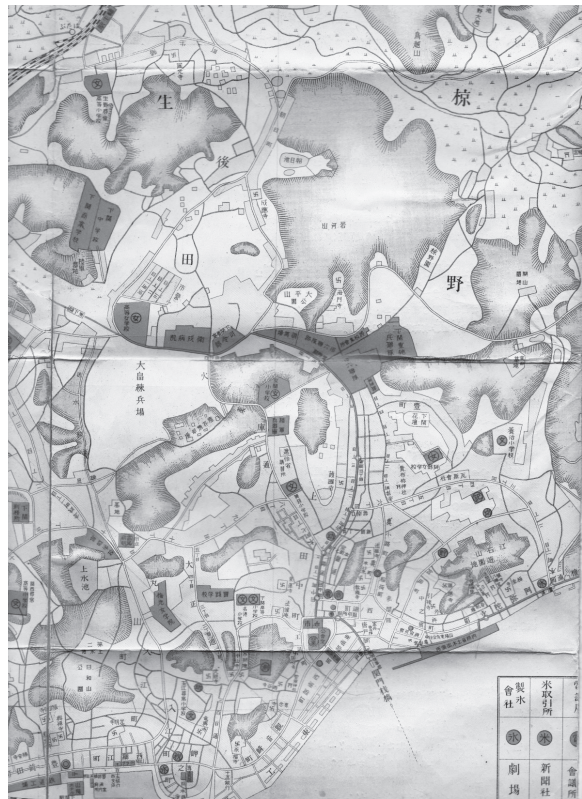


図5

非常に面白くて、老舗であるということと同時に軍隊との関連の中で位置付けが必要であります。例えば、下関で一番空襲を受けたのが軍隊施設から唐戸にかけての地域でした。空襲を受けた地域が、大正期には元気だった場所です。先ほど高月先生がお話しされた唐戸の交差点付近を中心にビルが並んでいたのです。大正時代には、そのあたりが軍隊の人たちが、遊んで帰った一つだったということです。もう一つの歓楽街は、下関駅から新地あたりです。今でも古い景観も残っていて、歩けばいいところです。昔の遊郭と思わしき建物も残っています。最近ではそういった古い建物を利用して喫茶店や料理屋さんが営業したりしているところもでき始めました。歓楽街というのはいろんな利用の仕方があってよいと思います。豊前田や唐戸では老舗のところがだんだん閉まっていくという現状があって残念です。私の知り合いは明治後半頃の寿司屋さんだった店で、今は居酒屋さんをやっていますが物凄くいい雰囲気ですね。二階が自分の自宅に使われています。私にとっては綺麗な住み方だと思います。

ここで、講演に対しての皆さんからの質問用紙にも少し答えておきたいと思います。私が「下関は軍都であった」と言ったもので、「もっと軍事的なものを街づくりに活かしたらどうだ」といったような提案がありました。まさにその通りで、マイナスの面ばかり捉えてはいけません。近代になってあらゆる都市に軍隊が居たのは当たり前の世界なわけです。軍隊との関係もあって唐戸市場は日本三大市場の一つと言われました。どんどんと大陸へ物資を送っていましたし、そこに市民も買い物をしにくる、それが街の発展に繋がったということです。軍隊にはさまざまな見方があります。国民を守るという安全保障という面で重要な意味があります。それは一つには「暴力装置的」な問題があります。しかし、「福祉」や「消費」といった多様な見方ができます。災害などの時に自衛隊が出動することは国民にとっての「福祉」としての活動と捉えられる面もあります。また、下関は大陸へ行く人たちの出入り口になっていたという点も重要な街づくりのコンセプトになります。軍隊だけでなく人々の通り道として重要なのです。実は私の父親は引き揚げ者でして「満鉄の朝鮮部」で勤めていました。引き揚げると国鉄に配属され、目的もわからず下関で引揚者の「米」を計っていたそうです。毎日それが続くもので、いやになって故郷の熊本に帰ったと生前に話していました。いろんな人が下関を通過していきました。しかし、下関にとどまった人もいました。下関というのは一つの溜まり場のなものとして発展したという面も目を向けるべきだと思います。

高月：

今、礒永先生が会場からのご質問にお答えになられた内容で、下関には陸軍の要塞司令部が置かれ、それに関連して都市として発展してきた側面もあるのではないかとということでしたが、今残っている建物で言えば、唐戸交差点のそばにある、明治初期に開かれた郵便局の流れを汲む南部町郵便局<sup>6</sup>〔図6〕です。礒永先生が基調講演で触れていらっしゃる、情報をいち早くキャッチしてそれを活かしていくことは、要塞都市としては重要です。下関では、それが残っています。

このほかに、大正時代に建てられた文化財になっている旧電話局舎〔図7〕がありますが、この電話局舎が新しく建てられた理由は、新たな電話交換の方式である共電式<sup>7</sup>を取り入れるためだったと言われています。これも情報戦の一つの側面が建物に表れていると言えます。



歓楽街の話に戻りますと、幕末、英国領事館の下関設置に大きな影響を与えたアーネスト・サトウ(1843~1929)やイギリスの士官達が、下関戦争の講和のために上陸したのが歓楽街にも近い南部のあたりだったわけですが、歓楽街はいろいろな情報を収集する場であったと思うんですね。建物は一切残っていませんけれども、要塞司令部が置かれる以前から、下関は「モノ」も行き交いますけれども情報もたくさん行き交っていた所で、歓楽街や料亭旅館で情報が飛び交っていたのではないかと思います。



図6



図7

清永：

料亭旅館とありましたが、そういったものはもともとどこあたりにあったのでしょうか。今と違うのでしょうか。

高月：

遊郭は稲荷町、現在の赤間町のあたりですね。稲荷町に遊郭があって、その周辺に料亭旅館があったと言われてます。明治以降の料亭旅館としては、さきほど絵葉書にも出ていたが春帆楼ですね。場所は赤間町から少し離れますけれども、ある町の狭い範囲に限定してではなく、現在の唐戸周辺には料亭旅館がたくさんありました。

岡本：

歓楽街を利用するのは、地元住民でもありますが、外から訪れる人、お客さんです。商売、物流ということ言えば、下関は北前船が蔵替える地で、越後の米が日本海を回って瀬戸内に回っていく際にいったん集積される場所であった、それに係るたくさんの人の往来を目当てに接待の場所、遊郭もたいへん栄えていたという場所です。高月さん、磯永先生に質問なのですが、唐戸、赤間町以外の場所、たとえば、現在の JR 下関駅の周辺の新地界限などは、どのような様子だったのでしょうか。卑近な話で恐縮ですが、我々の仕事の関係で外からお客さんが来られた時、よく新地の辺りにも、ご案内するお店があります。すると、お店の方から、ここはもともと遊郭だったんです、などというお話を聞かされることがあります。竹崎、新地のあたりというと、現在、グリーンモールという商店街があり、朝鮮半島にルーツを持たれている方がたくさんおられ、外国の物産のご商売もされています。「国際都市」としての下関の顔でもあった下関駅の移転の前と後で大きく変わってしまったと思いますが、過去の新地や竹崎のあたりはどのような街並みであったのでしょうか。

6 南部町郵便局は、明治中期以降、軍事通信の重要施設となり、東京、大阪から朝鮮、満州への中継局として、また、朝鮮、満州との直接回線が開通したことにより、昭和初期には重要回線の中継盤全てが下関に集中するなど、拠点として機能した。

7 各固定電話機に電源が必要であった磁石式に代わり、交換局で電気を供給し、利用者が受話器を取るだけで交換局につながる電話交換方式。下関での共電式の導入は、中国地方初であった。

礒永：

いわゆる下関は「下町の雰囲気」が非常にある土地柄です。大正頃は市場もあちらこちらにありました。唐戸市場は統計を見ますと軍隊や大きな商店相手だったわけですが。唐戸市場以外には庶民の市場で、そのまわりに下町があったということです。10年ほど前ですと下関駅から新地からグリーンモールあたりにかけてまだ商店街もあったし、戦前から続いたような居酒屋さんもあり情緒がありましたが、随分と営業を辞められて残念です。他の諸都市では古い商店街を活性化させていくというような動きがあります。まだ、下関も今ならば古い街並みを利用した町おこしができると思います。もっと皆さんで古い街並みを探して、宣伝していただければ、下関の活性化に繋がるのではと思っています。ただ、街並みが文化財になるという使い勝手が悪いんですね。改築ができないとかで反対が起こったりします。私は街おこしにたずさわった古い街並みの地図などをつくることが多いのですが、あまり活用されていません。

もっと下関市民の皆さん自身が、古い街並み景観に目を向けていただければよいと思います。確かに戦時中の爆撃によってかなりの街並みが消滅しましたが、新地あたりは面白い街並みが多く残っています。会場の中で高齢の方は、「大正ぐらいなんてそんなに古くない」と思われるでしょうけれども、もう100年近くも前なんですね。これからの日本を考えると年老いていくしか想像できませんが、若者達は古い街並みに魅力を感じる人も多いです。古いものを活かした生き生きとした商店街が新地辺りで復興して欲しいものです。今もなお細々と続いている「もの」をもう一回再発見できればと思っています。

清永：

実は、私も他所から来た者なのでよく存じ上げないのですが、下関駅の移転というのは一体いつ頃のことだったのでしょうか。

高月：

下関駅の移転は、関門鉄道トンネルの開通に伴って移転してしまして、昭和17年(1942年)です。

#### 4. 表象される都市としての下関

清永：

なるほど、頭の中が整理できたような気がします。

さて、いよいよ対談集会の方も後半に差し掛かって参りました。下関といえば、誰しも「海峡の街」として知っているわけですが、下関もまた、近代以来さまざまな形で自らを思い描き、そのイメージを共有し、その「自己理解」をイメージとして、地元住民はもちろんのこと、旅行者や他の地に住む人々に対して発信してきたことかと思えます。ところで、日本で私製絵はがきの発行が許可されるようになるのは、明治32年(1899年)のことだと言われます。つまり、それまでは自分で勝手に絵葉書を作って売ったりしてはいけなかったわけです。その後、絵はがきの蒐集が流行するなど、絵はがき、名所写真などは各地の街のイメージを伝える格好の媒体として取り上げられていくようになります。1940年代におけるカラー写真の実用化は恐らくそこに拍車をかけたことでしょう。もちろん、この下関も例外ではなかったはずですが。

そこでは、恐らく他者の目を意識しながら作り上げられていく自己イメージが生産されていたのではないのでしょうか。その一方で、逆に「外」から他者の目でみた下関のイメージも多く生み出されたに違いありません。そういった意味で、近代以降の都市の経験には「メディア」的な経験、メディアによって媒介された経験も重要なファクターとして含まれていたはずです。「メディア」を通して描き出し、綴られていく下関という都市のイメージについて、このテーマのエキスパートでいらっしゃる磯永先生にこの辺りのことをもう少し突っ込んでお聞きしてみたいと思います。

磯永：

実は、絵葉書の中で最後の方で「紋切り型」という話しをしましたが、他にも絵葉書が出ております。料亭の内部の絵葉書とか、遊郭の太夫さんがプロマイド風に写っている絵はがき〔図8〕とか様々なものがあるわけです。今回、この新シンポジウムを契機にして再確認しました。バラエティ溢れるものがあるにもかかわらず、先ほど講演した観光絵葉書のベスト5位までに入りません。現在も同じところが観光地となっています。残念ながら他の絵葉書の観光地は見落とされてしまっています。下関は古い街を残しながら、新たな場所に街を作っていった。古い街を潰して、その場所に新たな街を造るのは大変です。最近では「新下関」付近に現在人口の重心が移っていているという現状があるわけです。新幹線ができて田畑しかなかったところに、商業地区ができはじめ、私が出関に来てから新しい店や大型商店施設ができました。少し話がずれますが、シーボルトの研究でオランダのライデンの街を訪れたことがあります。びっくりするのは1600年代の建物がいまだに使われているんです。なぜ1600年代であることが判るかという、玄関のところに建築年が書いてあるわけです。それを誇りに思って、わざわざ住むのがステイタスなんです。日本の建築は寒いですね。今日、韓国から来られた方が風邪を引いたとって大騒ぎだったんですけども、とにかく寒い。要するに日本は夏と湿気に適応した建築になってしまっていて、真冬に対応していないわけです。下関は暖かいですね私はそのような「風土」といったものが、これから重要なものになってくるのではないかと考えております。下関を写した多くの絵葉書がありますが、それをヒントにして街おこしができればと考えております。

岡本：

下関から外に向けて発信するもの、メディアというのとは少しずれるかもしれませんが、来訪者に向けて発信していく媒体としてのお土産物という話題にふれたいと思います。さきほどから河村幸治郎氏の話ばかりとなってしまいますが、河村氏の呼び掛けで行われた郷土玩具の開発が、昭和初期のことです。これを代表するものが土笛の「ふくぶえ」ですが、ほかにも「壇ノ浦大漁人形」といった素焼きの置物、「錨鈴」という土鈴、その他張り子の玩具が創案されています。これは、大正時代に発して日本全国に拡がっていった柳



図8



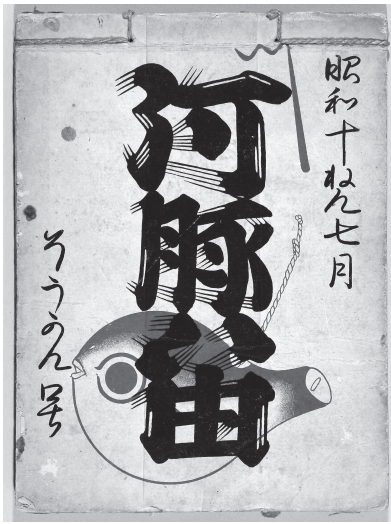


図9

宗悦の民芸運動にもつながるものです。雑器などともいわれた生活用品の中に美を見出して、それを拾い上げていくというのが趣旨で、大正時代に生まれた文化運動であるわけですが、これを受信して自ら携わろうという人が下関にもいました。それは、河村幸次郎氏であり、あるいは佐藤治氏(1909~1981)といった人々です。佐藤治氏は、第二次世界大戦後にかけて一貫して下関で民芸の研究をになわれ、第一人者となられました。下関での発端を記念する史料として河村幸次郎氏が編集し、昭和10年(1935年)7月に発行されたのが、『河豚笛』という民芸誌[図9]です。表紙には「そうかん号」と記されていますが、この1号限り。ふぐ笛のイラストは河村幸次郎氏が自ら描いたものです。ここで案が発表された郷土玩具の

寺社への奉納風景が写真資料として残されています[図10]。これは、佐藤治氏のご遺族からご提供いただいたものですが、郷土玩具は神社に奉納されました。それは、単に神社に納めただけではなくて、神社を訪れた人にお土産物としてお渡しするというコンセプトで納められたものです。下関を訪れる人の手に受け取ってもらい、下関のイメージを広める。それは、風景の写真、絵葉書などで下関の都市イメージを伝えるのとは異なり、民芸品という、美術によるコミュニケーションの試みです。

この『河豚笛』という書物には、読み人知らずの詞が紹介されています[図11]。「ほーほーとふぐぶえふきてなみぎわのやかたに妓らとふくたうべたり／ふえふきてふくたべなば死なずとてふくぶえをふく／われとをんなハ」と。節もつけられていたのではないかと思います。海に面した料亭の宴席で、芸者さんたちと河豚を食べたというわけです。笛を吹いて河豚を食べれば死なぬというのでふく笛を吹く、女と自分は。そして、「ふくぶえのくちにのこりしあかきいろ……」と続けて、ふく笛吹き遊びをして、吹き口に女性の口紅が残った、と生と死があやうくもすれ違う場面を印象づけます。料亭の接待で、ふぐ笛という郷土玩具がどう用い



図10

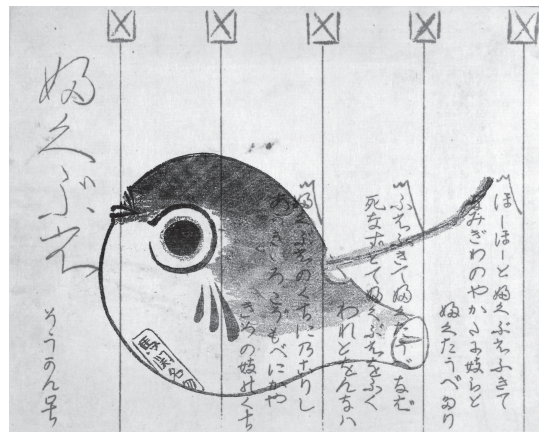


図11

られたかがよくわかります。ふく笛は、神社でお配りする品と料亭あるいは遊郭などで遊ぶ品が同じであるという、聖なる部分と俗な部分が合致した品というわけです。ただし、そもそも遊郭というのが聖なる場所であるとすれば、こうしたあり方は自然なことなのかもしれません。

## 5. 芸術的表象の対象としての下関

清永：

恋もフグの刺身も、どちらも「命がけ」ということでしょうか（笑）。

さて、表象される都市というテーマで話をして参りましたが、それに続きまして、海峡の街として下関は、たびたび絵画をはじめとした芸術的な表象の魅力的な対象やモチーフとなって参りました。尽きることのない素材を芸術制作にも提供し続けてきたのではないかと思います。そこで、まず岡本さんにその歴史的背景などについて、ご説明願いたいと思います。つづいて、川野先生にもお話を伺いたいと思います。川野先生は、これまで下関でも度々個展を開かれています。そこでは下関をモチーフにした作品なども発表してきておられます。画家の目から見てどんなところが尽きない下関の面白さであるのか、絵画の対象としての下関の魅力の所在についてお話しただければと思います。

岡本：

ひじょうに難しい投げかけですが、下関の景観を描いたものとして思い浮かぶのは、例えば狩野芳崖(1828～1888)の《馬関真景図巻》です。これは狩野芳崖が、元服した15歳で、「松隣」と名乗っていた頃に描いたもので、長さ5メートルほどある図巻です。芳崖数え年15歳という西暦では、1840年代の前半、幕末維新の激しい時代を前にした下関のにぎわいです。きわめて細密な筆の運びで描かれ、唐戸、三百目の辺りの商家や蔵の並びも非常に詳細です。ただし、この馬関真景の形式は、芳崖オリジナルというわけではなく、先行作品があり、日本国内にあるものと海外にあるものを含めて十数巻ともいう作例が知られています。ですが、芳崖の図は、先行作の型を引き継ぎながらも異様ともいえる集中力を発揮した描写で、独特の存在感を放つ作品です。

こうした図巻や田能村竹田(1777～1835)ら文人の往来の中で生まれたものなど近世絵画はある一方で、近代の絵画、たとえば油絵とか水彩画といった洋画、あるいは近代日本画の形式で描かれているものはほとんど思い浮かばないのが実情です。というのが、先ほど下関が軍事的な拠点であったというお話がありましたが、この軍事機密上の制約という問題があって、下関の景観・地形を絵画に写すことができなくなった、あるいは、描いたとしてもそれらを残すことができなくなったという事情があります。

川野：

私は、下関に関東から東亜大学に赴任してから今年で24年になりますけど、まだ唐戸の海側に倉庫街とかがありました。まだ海峡タワーはできてなかったし、カモンワークもなかったですね。僕はもともと東京葛飾に生まれ千葉の市川というところで育ったんですけど、やっぱり年代的なことも言えると思いますね。葛飾ってというのは町工場が沢山あって、朝からプレス



の蹴飛ばす音とかがしていたり、という場所です。そういう意味では、あまり空気のいいようなところではなく、街の色もそういう意味では人工的な色が多かったというようなところで育った覚えがあります。それで、縁あってこちらに来たわけですが、下関に来た当時やはり強烈に思ったのは、「原色」というか、自然の「原色」をすごく体感して、空の色も青さが青々としていて非常に美しい。夕方になるまでの、何ていうのか、赤いオレンジの色から、どんどんどんどん暮れていくまでの様っていうのが非常に鮮烈に目に焼き付いていくというか、そういった、自分ではいろんな色を使って描いてきたわけなんですけど、そういう色の移り変わる部分が強烈であり、そういう光景に本当にびっくりしたというか。それで、どこに行っても海があって、どこに行っても山がある。これも非常に僕なんか、僕の環境の中になかった風景ですね。それで絵の題名の中にも「海と山の景色」とか「海と山の街」みたいな感じで使っていますが、本当に海と山が一体となった、自分の中ですごく面白い場所だなという意識で描いて、何というか、普通に関門海峡とか描く人というのは割と一杯いますが大画家がいるわけではなくて、全国的にこの関門海峡が有名っていう作品は最近ないと思いますが、普通に地元の皆さん関門海峡をよく描いているんです。僕はずっと何かそういう、さっき言ったような時間に沿って色がどんどん変わっていく街で、さらに四季、春夏秋冬でもすごく景色の変わる街という断片的な部分が万人に魅力的であり、先ほどから言われている昔からの下関の歴史的な風景、長府なんかに行くと本当にタイムスリップしたような場所がいっぱいあるのが特徴的な地域だと思います。そういったところとの関わり合いの中で、僕の制作形式はこちらに来て様変わりして断片的な一枚一枚をどういう風にして一枚の絵の中に凝縮させて行きたいかみたいなことを割と自分の中でテーマに描いているような感じになりました。そんな部分、「原色」の街が非常に僕は下関のイメージだと思います。

それから、最近はずっと車で、皆さんもそうだと思いますけど、つい車で移動しますが、それは下関に限ったことではないと思いますけど、細い路地ですね。歩かないといけない場所、歩いて行かないと見えない場所っていうのがどこにでもあります。下関のそういうところもまた非常に面白くて、自分の足でないと見られないところ、そういったところからいろんなところを見る。例えば、うちの東亜大学のですね、ある階段のところのある場所じゃないと関門橋が見えなかったりとか、そういうちょっとした場所に来た時に何かこう下関の強いイメージのシンボルが見えて来たりする面白さとの出会い。何か路上観察学ではないですけど、そういう、歩いて自分の歩数で見ていく景色。そういう時間と自分の歩く歩数の流れの中で見える景色。そんなところが僕は非常に面白い場所だなあと感じます。これからもどんどんそういったところを見つけない。まだまだいろんな場所があります。僕は先日も放課後にちょっと彦島まで回ったら、「ああ、こんな素敵なお場所があった」という新鮮さを発見し、そういう新鮮さと「原色」、時間の経過で楽しめる街だと思います。

## 6. 「近代都市」と「他者（よそもの）」の役割、下関の場合

清永：

いよいよ残すところ10分少々になりました。最後のテーマの方に移ってまいります。少々余談になりますがけれども、これは磯永先生が最初にお話になったところと結びついていく話だと

思うのですが、かつて中世のヨーロッパ、特にゴシックの時代、12世紀あたりだと思いますけれども、パリをはじめとする大都市が形成されていったとき、周辺各地から流れ込んでくる豊かな農産物や製品などに加え、一緒になって流れ込んでくるいわゆる「他者(よそもの)」のもたらす情報や知恵が豊穡な都市文化を育むことに大きく貢献したとされています。当初は修道院、やがては大学などもそうした中で活発な活動を展開し、文化を盛り上げていくことになります。ある意味では「他者(よそもの)」が、市民として都市の発展に大きな役割を果たしていたというわけです。下関もまた、海峡の街としてたえずこうした「他者(よそもの)」と関わってきたわけですが、彼らはここ下関ではとりわけ芸術文化などの中で一体どんな役割を果たしていったのでしょうか。そして、今日、それはどんな役割を果たしているのでしょうか。また、将来に何が期待しうるのでしょうか。少々メッセージめいた問いになりますけれども、皆様、いかがでしょうか。

### 儀永：

私も「よそもの」なんですけれども、明治維新の話ですとか極力私自身としては避けたところがあります。源平の合戦だとかも同じですね。それはもう自明の理としてあって、やはり紋切り型だというふうに思います。というのは、要するに下関が歴史の教科書に載る。何回も登場してきて、他から見る目が固定化されたものになることに危惧をいただきます。それと同時に、通過地点としての下関というところのイメージが強くあります。私の勤めている東亜大学は留学生が多く、中国や韓国などの人達といろいろな付き合いがあります。やはり中国の方だと「下関条約」にインパクトがあって「下関を知らない人とかまずいないよ」という話になります。韓国の方では「関釜フェリー」の話から始まります。国内に目を向けると漁業の関係、長崎との関係が非常に強い。五島列島あたりで伝統的な「漁法」とともに近代的な「漁法」が發展します。そしてそれらの人達が下関に流れ込んでくる。国を越えて、そして国内からといった重層的に流れがあるということです。

下関には白石正一郎(1812~1880)という幕末の商人がいて、明治維新を語る時に必ず出てくることで皆さんご存知だろうと思います。正一郎が有名なのは彼が書いた『白石正一郎日記』があるからです。幕末に多くの志士たちが下関を訪れ白石宅に泊まりました。日記でどこから来たかの統計をとると、白石宅に来た人々というのは全部「よそもの」なんです。それで、どこへ行くかという京都に行くわけであって、下関は立ち寄っただけなんです。しかし、彼らは多種多様な「モノ」を運んでくる。下関ではその「モノ」が消化された場所と思います。人は増えた方がいいですが、通過も重要です。下関に「モノ」が流れ去っていった。人だけでなく「モノ」というものがそこで泊り、考えも泊ったとすれば、下関の見方が変わっていくと思います。そうすれば「よそもの」が言っている意見をしっかりと下関市民が捉えているといえるのではないかと思います。私は「東



図12 (下関名勝) 繁華隆盛を極むる一駅前前の並木通り

京志向型の下関」といったことがあります。だけど東京に行っても成功するとは限らない。今、下関はかつてのようにアジアに向けて発信する場所であるべきですが、現実としてはそういう志向は十分ではないと思うわけです。これからより国際時代になってきます。下関市も力を入れていただいて、中国からのクルーズ船とかやって来ているけど、市民とは会う機会がほとんどないわけですね。何かうまくそこで交流ができて、溶け込んでいけるような仕組みを作ることによって情報の街として下関がより発展して行くように思います。韓国の人たちも長府の町でよく見かけます。けどなかなか市民と触れ合う機会が少ないのです。かつて国際都市であった下関のイメージといったようなものも復活していける材料の一つになるかと思います。いろんな人々の交流をもっと深めていけたら、新しい発信の場所、通過する場所なんだけれども、そこに落とされる「モノ」が作り出す独特の下関というものが見えてくるのではなかろうかというふうに思うわけです。

## 7. エピローグ

清永：

いよいよ時間の方、あと僅かになりました。最後になりますが、今日はことさら近代以降の話を持ち起こしながら、皆さんと一緒に話をしてお話をしました。何も忘れられたかつての「栄光」をことさら掘り起こし、感傷的に甘いノスタルジーに耽るだけではなく、もう少し前の方を向いて別の問題を考えたいという気持ちもあったわけですが、最後に高月さんにまとめていただきたいと思いますが、過去の歴史を絶えず新たに再構成し語り続けていくこと、こうした営みは一体何をもたらすことになるのでしょうか。

高月：

先ほどの「他者の眼」の続きですけれども、都市に現れているものだけで見てみると、下関の場合「他者の眼」が非常に強くて、例えば今残っている歴史的な建物は、地元の人々の要望でできたというのが少なく、電話局にしる、郵便局にしる、領事館もそうですが、国ないしは外部の人が下関にこの施設を望んでつくったというのがほとんどです。そういう外部から望まれてつくられた建物が残し、それを私たちがどのように解釈し、これからの街にどう活かしていくかを考えるにあたって、「他者の眼」も一つのきっかけにしていただければと思います。

実は、英国領事館は、平成20年(2008年)から修理のためしばらく休館していましたが、平成26年(2014年)7月にリニューアルオープンしました。英国領事館の2階では、夜はパブを営業しています。こちらのPR不足もありますが、そこに持たせている意味というのが広く伝わっていないようなので、ここで改めてご紹介させていただくと、イギリスの文化の中でパブは地域に浸透しています。今のパブをみると大衆居酒屋のようなイメージですが、元々は「パブリック(public)」、公的な、というところから来ていて、「パブリック・ハウス(public house)」という多くの人が気軽に立ち寄れる街中の便利な社交場が、パブが持っている本来の姿だったんですね。英国領事館が、住民の方や観光客に気軽に立ち寄っていただき、地域の発展やいろいろなことを賑やかに話していただけるような位置付けになればという願いも込めて、パブの営業をしてもらっています。



英国領事館のように、建物から連想されることも意識しながら、皆さんにいろいろなお知恵を出していただいて街の顔を作っていただければいいんじゃないかと思います。礒永先生のお話にもありましたけれど、これからは住民参加が一つのキーワードになっていくと思いますので、住民の方々に参加していただいて、都市の顔づくり、歴史的なものだけでなく、今日お話を挙げた様々な側面から都市を眺めていただいて、今残っている建物に何らかの意味づけをし、同じ認識のもと、都市の発展を考えていかなければならないと感じていますので、今日お話を聞いていただいた皆様には、ぜひ皆様の視点で、「私はこういうふう都市を捉えている」とか「こういう捉え方もできるんじゃないか」ということを、どこかまた別の機会に盛んに話していただけるといいのではないかと思います。

清永：

地域住民の「眼差し」と「志」でつくられる下関の未来というふうにとまめたらとめすぎでしょうか。住み慣れ見慣れた当たり前の日常の風景がこういった語り合いによって新鮮な輝きを取り戻してくれたら、あるいはどこかしら懐かしさとともにエキゾチックなものとして立ち現れてくるようになったとしたら、多少ともこのトークもそのささやかな役割を果たしたと自負することが許されるのかもしれませんが。本日は、ご清聴誠にありがとうございました。そして、ゲストの皆様、お疲れ様でした。これにて、対談集会の方を閉じさせていただきたいと思えます。

再録（当日配布資料）

資料①

基調講演資料

近代下関の都市的経験

磯永 和貴

近代都市に住む人びとは何を経験したのであろうか。1889年(明治22年)の市制施行で全国31市の一つとして「赤間関市」が誕生した(1902年に「下関市」と改称)。当時の人口は約3万人、全国で22位であったが、山口県では初の市でありまさしく近代都市であった。

**情報** 下関はアジアへの玄関口であり本州と九州への連絡路として、人と物が行き交う拠点であることから重要な情報が集積した。そのため郵便・新聞・電話、映画館などが設けられた。

1871年(明治4年)に東京と長崎間で郵便業務が始まると郵便取扱所が設けられた。1872年(明治5年)には関門海峡に海底ケーブルが敷設され翌年に電信業務も開始されている。1883年(明治16年)には下関の洋風建築第一号として煉瓦づくりの郵便局も完成した。当時の職員は洋服の制服で珍しかった。局舎は1900年(明治33年)に移転したのが現在の「南部町郵便局」である。1902年(明治35年)には下関駅前に「赤間関郵便電信細江支局」が開設された。さらに1905年(明治38年)の「関釜連絡船」の就航と同時に一等郵便局の下関西郵便局に昇格し翌年庁舎が完成した。

1880年(明治13年)には下関の米相場を速報するために『馬関物価日報』が発刊され、1911年(明治44年)に『関門日日新聞』に改称し「関日」の愛称で親しまれ最高部数4万部とされた。1893年(明治26年)には『馬関毎日新聞』が刊行された。しかし、1921年(大正10年)に大阪朝日・毎日が進出すると地元の新聞は規模を縮小した。新聞は日清・日露戦争の唯一の情報源であり需要を一気に伸ばした。ここ下関は陸軍大将「乃木希典」の出身地であったことも幸いした。

「赤間関電話交換局」が開設されるのは1889年(明治22年)のことである。中国地方で初の開局であった。開局当時の電話加入は146台で半数以上が米取引業者であったが、1911年(明治44年)に939台、1925年(大正14年)には2,520台となった。当時の電話交換手は女性であり、いわゆる「職業婦人」としての花形の一つとなった。

下関へ映画が来たのは1905年(明治38年)頃で、「弁天座」で日露戦争関連のニュース映画が上映されたのが始まりである。下関の常設映画館は1909年(明治42年)に豊前田町にできた「朝日館」が最初で大いに賑わった。1915年(大正4年)には西細江海岸通りに「山陽倶楽部(後の山陽映画劇場)」、赤間町に「東館」(後の「寿館」)や「いろは倶楽部」などが開館した。見知らぬ国外の「情報」を文字や音声、映

像などの「視覚」や「聴覚」などを通して得られることは都市的経験の一つであった。

**衛生** 1889年(明治22年)の市制施行と同時に竹崎町・岬之町・阿弥陀寺町に「公衆便所」が設置された。1893年(明治26年)には「下水溝」の工事が起工した(1897年完工)。1906年(明治39年)には全国で9番目の「水道」の給水がはじまった。1912年(明治45年)には上水道の水質検査や衛生に関する試験や調査、市民の病気予防や健康増進などの観点から「県立細菌研究所」が開設された。後の県立下関保健所である。1906年(明治39年)には「東部塵芥焼却場」、翌1907年(明治40年)には「西部塵芥焼却場」も完成した。

港町である下関は他の地域から伝染病などが乗客などを媒介してやってきた。1901年(明治34年)には「高尾病院」(現・市立病院)が開業し、彦島、長府、小月、清末に次々と分院を開業していった。また、1912年(明治45年)に「市設家畜市場」が開設されたおりに高尾病院に「細菌検査場」が設けられた。個人病院も開業し1920年(大正9年)には医師74人、歯科医16人、看護婦150人を数えた。1894年(明治27年)に清国から来航する船の検疫をするため「地方検疫所」が設けられた。その当時は日清戦争のさなかにあつて、陸軍も彦島に清国からの運搬船の検疫と消毒を行った。この陸軍の検疫所は後に朝鮮半島から輸入する牛を中心とした家畜を検疫する「福浦家畜検疫所」となる。近代都市は衛生的でなければならなかった。見た目の美しいだけでなく「清潔」が求められたのである。

**ガス・電気** ガス灯は近代都市の象徴であり電灯よりも早く使用された。下関のガス事業は1907年(明治40年)にその計画が立案され、市に対し道路の使用についての願いが出された。1910年(明治43年)には「下関瓦斯株式会社」は市と契約を結び本町三丁目に工場を建設し、翌1911年(明治44年)に740戸にガスの供給を始めた。一方の電気は1896年(明治29年)に山口県で初の電気が通じた。観音崎町に「馬関電灯株式会社」が創立され、岬之町に「発電所」が設けられた。しかし「電灯」は高価で一般家庭ではランプが使用されていた。電灯が本格的に普及するのは大正時代である。1913年(大正2年)には「長府電灯株式会社」が、翌1914年(大正3年)には「彦島電灯株式会社」ができたがいずれもその後合併した。ガスと電気の普及は近代都市で暮らす人々の夜を明るく美しく照らし、産業にも大きな影響を与えたのである。

**市場** 近代都市の消費を支えたのは市場である。魚

市場は東部、西部、中央に市場があり統廃合を繰り返した。東部の市場は1905年(明治38年)に個人経営から「市営阿弥陀寺第一・第二、新地魚市場(後の西部市場)」があった。1908年(明治41年)には阿弥陀寺第一・第二市場が統合され「東部魚市場」(「阿弥陀寺市場」)と称された。1924年(大正13年)には唐戸に木造スレート葺きの市場が建設され小売から卸売に発展した。これは青物市場が隣接していたからである。これに対し西部の魚市場は主に下関での消費が目的であった。東部・西部魚市場に対し中部市場(岬之町市場)は卸売市場として機能した。1901年(明治34年)に山陽鉄道の開通に伴い地方への発送が行われ始めたが、当時は冷凍技術が発達していなかったことからもっぱら乾燥・塩蔵であった。ようやく1929年(昭和4年)に岬之町海岸が埋め立てられたので中央市場が完成した。このような魚市場の発展は漁業の近代化にもつながった。

青果市場は1899年(明治32年)頃に唐戸で、近くの農家や商人などが野菜や果物を路上で販売したことに始まる。1909年(明治42年)には「市場規則」が設けられ「下関市青物市場」が誕生したが相変わらず唐戸での路上販売であった。取引時間は日の出から午前11時までで正月以外は年中無休の営業であった。1918年(大正7年)頃には青果問屋や仲買人もできた。市場は人々でごった返しその数は1日平均で5,000人に達した。直接生産者が最も多かったが、農家から購入した品物を売る仲買人や下関に店舗を構え業者が販売することも多かった。また、遠くは北海道をはじめ中国や四国、九州、さらには満洲や朝鮮半島などからの特産品も運び込まれた。果実では台湾産のバナナが一番多かった。1923年(大正12年)には市場は拡大し取扱高は598万円に達した。その消費は九州が46%で、下関が31%、朝鮮半島と満洲が23%であり下関の立地条件がよくわかる。この頃の青果市場は日本の三大市場の一つとなった。その背景は1883年(明治16年)に特別輸出港となり対韓貿易の玄関口となり、1899年(明治32年)には第一種港湾(海外貿易港)に指定されたことがあった。また、1890年(明治23年)には要塞歩兵大隊が設置され、日清・日露戦争時には膨大な軍需品を送った。また、「日清講話条約」がここ下関で行われた。下関は「軍都」としても機能した。喧騒の音に包まれた市場は都市に暮らす人の生命の源であった。また見知らぬアジアへと接近できる場所でもあった。

交通 下関では1901年(明治34年)の「山陽鉄道」の京都・下関間が開通して西細江に「馬関駅」が、1905年(明治38年)には「関釜連絡船」が就航し内外の人々が下関へとやってきた。1902年(明治35年)には「下関駅」と改称されると駅前「山陽ホテル」が営業を開始した。1914年(大正3年)には「長州軽便鉄道」が東下関駅(現、東駅)と小串間に、1926年(大正15年)に「長門鉄道」が小月と西市に開通した。市内電車は同年に長府と壇ノ浦間が開通し昭和になって順次延伸された。バスは、1913年(大正2年)に土井自動車バスが東駅と唐戸間の路線を走ったのが初めてである。同バスは1923年(大正12年)頃まで

に下関駅を起点とし、長府や東駅にいたる路線が拡張され人気を博した。その後バス会社が乱立し市内や小月、吉見などの郊外地まで路線が伸ばした。これは市街地の拡大に伴い近代都市下関内部を循環し後背地を結ぶものとなった。バスの延伸は国道や県道の改修、道路の新設へとつながったのである。この鉄道やバスは都市的経験の五感を揺さぶる刺激に溢れていた。

教育 市制施行直後の下関には文関・養治・関西・大江・菁莪尋常小学校と赤間関高等小学校があった。本格的な中等学校は1899年(明治32年)の中学校令の改正で「山口県豊浦中学校」(現・県立豊浦高等学校)ができた。女子教育は1905年(明治38年)に「下関市立高等女学校」(現、県立長府高等学校)ができた。1910年(明治43年)に「下関商業学校」も成立した。また、幼稚園は1892年(明治25年)に「長府村立豊浦幼稚園」、1899年(明治32年)に「赤間関幼稚園」、1909年(明治42年)に「第二・第三幼稚園」が発足した。教育は近代化に果たした影響は大きい。子供たちが幼稚園や学校に行くことにより夫婦が働けるといった側面があったことも見逃せない。これらの教育施設は子供や親たちに24時間、1週間、祝日などの都市的生活の「時間」を浸透させた。さらに、制服姿の学生や袴姿の女子学生なども近代の都市的経験である。

\*

最後に下関が舞台である『怪談』、冒頭に載る「耳なし芳一の話」の著者ラフカディオ・ハーンが「近代都市の経験」を見ておこう。彼は1891年(明治24年)から3年間熊本市の第五高等学校で教鞭をとった。その時に下関へ立ち寄った。彼は第五高等学校時代に「極東の将来」と題する講演を行い「将来、日本が偉大な国になるかどうかは、(中略)素朴、善良、質素なものを愛して、生活での無用な贅沢(ぜいたく)と浪費を嫌悪する心を、いかにして持ち続けるかどうかにかかっている」と述べている。彼は日本の近代都市に住む人びとの生活と心のあまりの変化に危惧を抱いたのであろう。「近代下関の都市的経験」もその例外ではなかったはずである。

〔編註〕 本資料は、『下関市立美術館NEWS「潮流」No.128(下関市立美術館、平成28年12月25日)の「展覧会紹介」枠において、「特別寄稿 近代下関の都市的経験「動き出す!絵画 ペール北山の夢」展の下関開催に際して」として掲載されたものに一部加筆を行って「アート・トークしものせき」の当日配布資料としたもの。



## 資料②

— とある「私」の記憶 —

磯永 和貴

私は農家の三男として育った。「尋常小学校」を卒業して「高等小学校」へと進学した。学校では「カラン、コロン」という鐘を合図に「時間」通りに授業が始まり、「一週間」という「曜日」や「祝日」も自然と身に付いた。卒業すると家族と一緒に農作業をしながら生活をした。夜なべ仕事は「ランプ」がたよりであった。私には兄が2人いて、どちらかが家を継ぐことになっている。私はいつかこの家を出て行かねばならない。

ある時に「新聞」を見ていると「マチ」に「工場」が働き手を募集している記事が目についた。「給料」もなかなか良い。そこで私は「戸籍」の証明を「役場」でとった。海に近い「赤煉瓦」の工場に勤めることになるので近くの宿舎に住んだ。工場や宿舎には「電気」がついて夜も明るかった。一番驚いたのは「水道」である。蛇口をひねると飲める水がでるのだから。食事朝・昼・晩と三食を食べた。汚い水は「下水溝」で流されていく。私は工場で「制服」を着て、「サイレン」の音に従って溶鉱炉に燃料を入れる仕事を行った。事務所には「電話」が設置され東京の本社にも簡単に連絡できるという。海には見たこともない大きな船が行き交い、工場の製品を運んで行く。外国船も行き交っている。中国や朝鮮半島を結ぶ航路もできたらしい。「軍隊」が町にやってきたのもこの頃だったように思う。軍隊ができると兵隊のための食料を確保するために魚市場や野菜市場が賑わった。日曜日や祝日には息抜きにマチにでて「商店街」で買い物や食事をして芝居や「活動写真」なども楽しんだ。たまには、「カフェバー」で「ビール」を飲むこともあった。道はどんどんと広くなりきれいになっていく。

それから幾年かが過ぎ私は同僚の紹介で女性と結婚し宿舎を離れ間借りをした。長男が生まれる頃になると工場の近くにも商店街ができ日々の生活に必要な食料品や衣服などは事欠かなくなった。実家にいた頃は母が作った和服を着て自分の家で作ったもので食事をしていたが、今では何でもお金で買える。日を追うごとに工場の従業員も増し、その家族たちの家が周囲にでき「郵便局」や「銀行」などもできて手紙や貯金ができるようになった。私たち家族にはやがて長女が生まれ手狭になったので小さな一軒家を借りた。その頃には私の家にも電気がやってきた。そういえば近頃では「自転車」が走るようになった。たまにはあるが「自動車」もみることがある。マチには「鉄道」も開通して赤煉瓦の「駅舎」ができ、しゃれた「ホテル」や「デパート」などもでき益々商店街は繁盛している。この頃はマチへ行くにも「チンチン電車」や「バス」が開通して楽に行けるようになった。マチには「モダン」な服を着た女性や男性が目立つようになった。高等女学校に通う学生はセーラー服を着ている。私の長女も将来は、高等女学校に通わせたいと思っている。できれば、最近ちらほら見かけるようになった「文化住宅」に住みたいと考えている。そういえば、今日は日曜日でマチに出て「ラジオ」を買うことにしている。音楽が聴けたり、さまざまなニュースや天気のことを知れることが楽しみである。

資料③


対話集会 コメント要旨(高月鈴世)

### 日本の建築の歴史(近代)


- ・「近代化」とは？  
 “飲料水” → 井戸水 から ろ過された上水 へ  
 “あかり” → 行灯、松明など から ガス、電気 へ

幕末以降、日本の近代化に  
貢献した交通、産業などの  
遺産 ⇒ 「近代化遺産」

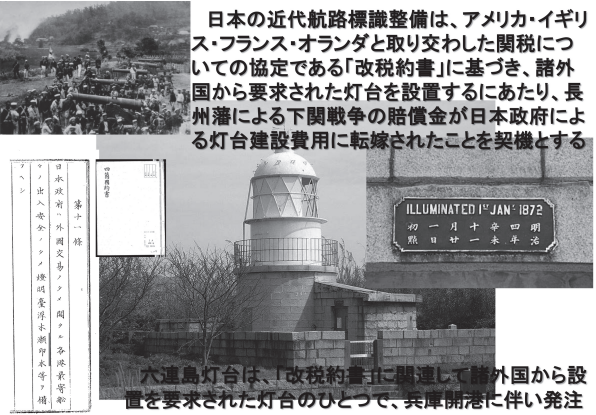
- ・ 1920年代  
 現在の生活の基盤が  
 ほぼ調った ※ 工業製品



近代日本の航路標識  
六連島灯台・部埼灯台(1872)

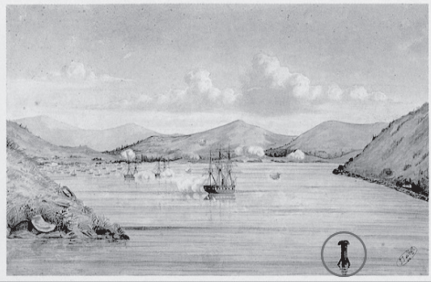


日本の近代航路標識整備は、アメリカ・イギリス・フランス・オランダと取り交わした関税についての協定である「改税約書」に基づき、諸外国から要求された灯台を設置するにあたり、長州藩による下関戦争の賠償金が日本政府による灯台建設費用に転嫁されたことを契機とする



六連島灯台は、「改税約書」に関連して諸外国から設置を要求された灯台のひとつで、兵庫開港に伴い発注された

ヤン・ヤックス・デ・ハート 下関鎮夷戦争図(1863)  
【下関市立美術館所蔵】



下関市指定有形文化財 旧金ノ弦(かねのつる)岬灯台  
R.H.ブランドン / 1872竣工、1890改造、1920移築  
日本最初の礎標(立標)



(近代以前)



下関南部町郵便局庁舎 (旧赤間関郵便電信局)  
明治33 (1900)年/通信省(三橋四郎)

## 下関南部町郵便局の特徴・評価

- ◎現存最古の現役郵便局舎
- ◎本格的ルネサンス様式の煉瓦造庁舎建築
- ◎明治30年代前半における西洋技術意匠修得の技術的水準を示す作品
- ※ ルネサンス様式 (官庁建築によく見られる) 左右対称, 水平的な広がり, "おだやか"
- ※ 「第二代」の作品 (辰野金吾の教え子) 辰野金吾の師: ジョサイア・コンドル



旧下関英国領事館 本館・附属屋 附煉瓦塀  
明治39年(1906)/ウィリアム・コーワン

## 旧下関英国領事館の特徴・評価

- ◎領事館として使用することを目的に建設された建物としては、わが国に現存する最も古いもの
- ※住宅系の建物を領事館として利用したものには、旧居留地等により古い事例が存在
- ◎本館、附属屋がそろそろ建物配置や執務室と住居を分けた本館の平面構成は、領事館という建物の性格をよく示しており、明治期の外交関連施設の一典型を示す

ル・コルビュジェ  
近代建築の五原則

“新しい建築の五つの要点”

- ◎屋上庭園
- ◎自由な平面
- ◎水平に連続する窓
- ◎自由な立面
- ◎ピロティ



唐戸交差点



記録～「アート・トークしものせき 2017」連動企画／市街巡見イベント～  
シリーズ「下関の＜近代＞を訪ねて」

「アート・トークしものせき 2017」の討議を踏まえて街に繰り出し、下関に残る大正-昭和前期の建築や景観を訪ね、近代都市・下関のイメージ再構築を試みた3日間のイベント。

① 探索・長府のまち

古代に長門国府が置かれて以来、都市として長い歴史を持つ長府。ここには、古代国府、中世府中、近世城下町と各時代の歴史的景観が、近代-現代の街並みの中に重層的に残されている。この稀有なる歴史的景観は、これまで近世以前のイメージを追う場として人々に愛されてきたが、その陰で十分に意識されていない近代的要素に焦点を移し、新しい長府像を立ち上げることが可能なのか、参加者とともに探った。



長府総社町の旧山陽道の家並



下関市立長府図書館下関文書館

【ナビゲータ】

磯永 和貴

【日時】

平成29年(2017年)2月12日(日) 14:00～16:00

【出発点】

下関市立美術館

【主な訪問先】

- ・旧山陽道  
下関市長府総社町から長府土居の内町、長府中浜町の長府商店街まで
- ・下関市立長府図書館下関文書館  
建設：大正2年(1913年)  
下関市長府宮の内町 1-30
- ・乃木神社  
造営：大正9年(1920年)  
下関市長府宮の内町 3-8
- ・神戸製鋼所長府製造所  
設立：昭和13年(1938年)  
下関市長府港町 14-1



乃木神社境内



神戸製鋼所長府製造所入口前

【参加者】

44名（随行：下関市立美術館 河本 華子）



旧秋田商会ビル 4階広間



山口銀行旧本店 内部



中国労働金庫下関支店



下関市立近代先人顕彰館 田中絹代ぶんか館前

## ② 定番再見からその先へ・唐戸のまち

関門地域の煉瓦造のロマンティックな明治建築群——下関においては明治39年(1906年)竣工の旧英国領事館が代表——ではなく、コンクリート造の旧秋田商会をはじめとする1920年代／大正-昭和初期のモダニズム建築に焦点を移しての建築巡見。多くの市民にとっては見慣れた風景であるが、唐戸交差点を中心に、唐戸・南部町一帯に形成されていたモダニズム的景観を脳裡に再現するべくコースを設定した。

### 【ナビゲータ】

高月 鈴世

### 【日時】

平成29年(2017年)2月19日(日) 14:00～16:00

### 【出発点】

下関観光情報センター(旧秋田商会ビル)

### 【訪問先】

- ・下関観光情報センター(旧秋田商会ビル)  
建設年：大正4年(1915年)  
下関市南部町 23-11
- ・山口銀行旧本店(旧三井銀行下関支店)  
建設年：大正9年(1920年)  
下関市観音崎町 10-6
- ・中国労働金庫下関支店(旧不動貯金銀行下関支店)  
建設年：昭和9年(1934年)  
下関市南部町 21-23
- ・下関市立近代先人顕彰館 田中絹代ぶんか館  
(旧逓信省下関郵便局電話課庁舎)  
建設年：大正13年(1924年)  
下関市田中町 5-7

### 【参加者】

27名(随行：下関市立美術館 岡本 正康、  
河本 華子)

### ③ 探索・新地のまち

現在のJR下関駅を中心に港町下関の栄華の影が残された界隈。「新地のまち」と銘打ったものの、当日、新地はかすめるように眺めるにとどめ、竹崎へ。探索エリアは、ほぼ第二次世界大戦後の建築による景観だが、そこにより古い時代の残像を求めようという趣向。まず、駅前の国道191号線からひとつ入った、かつて商店や料理屋、遊郭が軒を連ねた中通りを歩き、市営竹崎住宅群及び長門市場へ。さらにJRの鉄路とグリーンモール商店街を過ぎ、竹崎二丁目の改良住宅群から茶山通り、長崎新町の長屋の路地へと分け入る。そこからふたたび歓楽街(豊前田)に流れ、戦前の下関駅があった細江に行き着く。国際都市・下関の陰影に富んだ深部にふれる巡見は、参加者の中から「衝撃的な体験」という感想も聞かれるものとなった。

#### 【ナビゲータ】

磯永 和貴

#### 【日時】

平成29年(2017年)2月26日(日) 14:00 ~ 16:00

#### 【出発点】

JR 下関駅

#### 【主な訪問先】

- ・竹崎町の市営住宅群(市営竹崎住宅、市営竹崎改良住宅)  
建設：昭和38年(1963年)
- ・グリーンモール商店街  
以上、下関市竹崎町三丁目及び二丁目
- ・茶山通り及び長崎新町の長屋  
下関市長門町及び長崎新町
- ・豊前田商店街・要通り  
下関市豊前田町、細江町一丁目
- ・旧山陽ホテル跡地及び旧下関駅跡地  
下関市細江町三丁目

#### 【参加者】

39名(随行：下関市立美術館 岡本 正康)



竹崎の中通り



市営竹崎住宅・長門市場



グリーンモール商店街



茶山通りから長門町・長崎新町の路地へ